

私の阿蘇谷「阿蘇黄土」 2012.11.1.&11.2. by Mutsu Nakanishi

阿蘇谷にベンガラの原料「阿蘇黄土」を訪ねました  
また、帰りに日本一美しい姿ダム 豊後竹田 白水ダムへも

2012.11.1.&11.2.



卑弥呼が魏に送った「神聖な赤 丹」は「阿蘇谷のベンガラ」との説がある  
阿蘇谷のベンガラは かつて火口湖の時代に形成された大量に鉄分を含む「阿蘇黄土」とよばれる濁鉄鉱  
このベンガラの郷 阿蘇谷に弥生の後期 大量に鉄を集積した集落が幾つも出現した  
日本での製鉄開始にこの阿蘇黄土が役割を演じたのではないか…  
まだ その証拠はないが 日本誕生のロマンを秘めた「鉄のふるさと 阿蘇谷」である

## 私の阿蘇谷「阿蘇黄土」 2012.11.1. by Mutsu Nakanishi

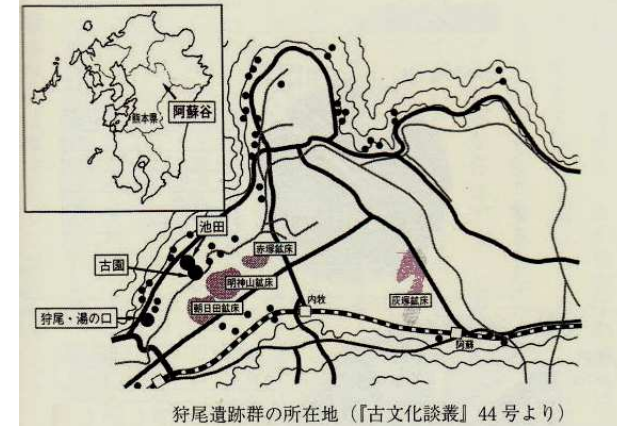
阿蘇谷に大量に埋蔵されている濁鉄鉱ベングラ原料の「阿蘇黄土」これが日本での製鉄の開始と関係していないか……

阿蘇谷に出現した大量の鉄を保有する村の出現は証拠こそないが、それを示すのでは……  
是非 一度阿蘇谷に行って「阿蘇黄土」に出会いたいと……

阿蘇谷に大量に埋蔵されている「阿蘇黄土」は鉄分を70%近く含む「濁鉄鉱」  
神聖な「赤」ベングラの原料であるばかりでなく、鉄鉱石・砂鉄とならぶ製鉄原料  
日本各地にこの濁鉄鉱の伝承が残る。

阿蘇谷に出現した大量の鉄を保有する村の出現は証拠こそないが、阿蘇谷での  
製鉄の可能性を示すのでは……  
是非 一度阿蘇谷に行って「阿蘇黄土」に出会いたいと……

弥生時代後期 卑弥呼の時代の前夜 先進材料であった鉄器を大量に集積した  
集落が山深い阿蘇谷に出現し、古墳時代が始まると忽然と消えていった。  
同時期 淡路島にも大鍛冶工房集落五斗長垣内遺跡が出現し、同じように古墳  
時代が始まると忽然と消えてゆく。  
謎の鍛冶工房村の盛衰?? 実用鉄器が広く使われ始める幕開の時代である。  
日本でも小規模ながら製鉄が始まったのではないかと推察する研究者もいる。



狩尾遺跡群の所在地 (『古文化談叢』44号より)

2011. 10月 愛媛大学東アジア古鉄文化センター歴史講演会「弥生時代の小さき製鉄か工具たち 阿蘇・下扇原遺跡の出土品から」で熊本県教育委員会 宮崎敬士氏から阿蘇谷 下扇原遺跡&小野原A遺跡の発掘調査の話聞き、鍛冶工房を含む数多くの住居・鉄器・鉄滓が出土し、住居の床敷きやあちこちに大量にベングラがあったと。愛媛大村上恭通教授の話では1000°Cを超える高温で焼かれたと考えられる謎の鉄滓も出土していると。

でも 炉跡からは粒状の鉄など製鉄が行われたという証拠は何一つ見つかっていないとお聞きした。

阿蘇谷に大量に埋まっていて 今も採掘が行われていると聞く濁鉄鉱「阿蘇黄土」  
この黄土を焼けば 簡単に真っ赤な「ベングラ」が得られるといい、  
比較的低温度の900°C程度以上で、溶け始め、凝集が起こると聞く。  
是非とも一度 現物を見て 弥生の鉄に思いをはせたいと……

【和鉄の道・Iron Road】10iron11.pdf <http://www.infokkna.com/ironroad/2010htm/2010iron/10iron11.pdf>

## この秋 二つの弥生時代後期の製鉄関連遺跡の講演会を聞いて

「阿蘇谷 大量の鉄を集積した集落 下扇原遺跡 と 淡路島 西日本最大級の鍛冶工房村 五斗長下記内遺跡」

2010.11.5. by Mutsu Nakanishi より

熊本県阿蘇谷にも 弥生時代後期 鉄を大量に集積した鍛冶工房を持つ集落が出現し大和王権の成立過程で消えていった  
その出現と衰退は 淡路島に出現した西日本最大級の鍛冶工房村 五斗長垣内遺跡とよく似ている



弥生後期 大量の鉄を集積した集落群があった阿蘇谷



弥生後期の大鍛冶工房村 淡路島五斗長垣内遺跡

弥生時代後期 阿蘇山の外輪山の内側の山裾 阿蘇谷のベンガラ産地に下扇原遺跡など鉄を大量に集積した鍛冶工房を持つ集落が幾つも出現し、大和王権の成立過程で なぜかよく判らないが、一斉に消えて行った。  
なぜ こんな山深い阿蘇谷に大和をしのぐ鉄の集積があったのか??

もう 一つ 私のひそかな興味 「大量にこの地に存在するベンガラ原料・黄土が古代製鉄の原料になった可能性」  
弁柄・黄土を還元すれば 鉄が取れる。 この数多くの鍛冶工房のどこかで、製鉄をやっていた痕跡がないだろうか???と聞いてみましたが、この阿蘇谷では見つからないと。 やっぱり ベンガラをそのまま製鉄原料に使う軒無理なのでしょうか…

(ただし、昭和の世界大戦 鉄不足の時 ベンガラが製鉄原料として 北九州に送られたと別の機会・資料で聞いたことがありました。)

私の阿蘇谷 2012.11.1. by Mutsu Nakanishi

2010.11.5. 和鉄の道10Iron11.pdf より <http://www.infokkna.com/ironroad/2010htm/2010iron/10iron11.pdf>

10月9日 久しぶりに松山 愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター第6回 アジア歴史講演会へ

■ 10月9日 愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター第6回 アジア歴史講演会  
「弥生時代の小さき鉄製加工具たち—阿蘇・下扇原遺跡の出土品から—」



愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター第6回 アジア歴史講演会



阿蘇谷 下扇原遺跡の位置

いつも新しい鉄の知見を教えてもらえる楽しい愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センターの講演会。

第6回アジア歴史講演会「『弥生時代の小さき鉄製加工具たち—阿蘇・下扇原遺跡の出土品から—』」を聴講させてもらった。  
あまり知らなかった北部九州以外の製鉄関連遺跡のシンポ。

知らぬことばかりで、阿蘇山の外輪山の中 阿蘇谷はベンガラの産地だと知っていましたが、弥生時代後期大量に鉄を保有した遺跡群があったこと初めて知りました。

弥生時代後期 阿蘇山の外輪山の内側の山裾 熊本県阿蘇谷のベンガラ産地に下扇原遺跡など鉄を大量に集積した鍛冶工房を持つ集落が幾つも出現し、大和王権の成立過程で なぜかよく判らないが、一斉に消えて行った。

	刀剣	鋸	工具	磨丸	俊原	他	小計	本所	総数	備考
阿蘇	83	398	460	108	213	61	1663	243	1746	
熊本	17	372	189	169	45	37	823	1068	1891	
佐賀	25	47	91	80	69	19	337	28	365	
大分	3	32	60	13	17	52	203	20	223	上中野2号
長門	25	27	223	94	70	88	518	149	664	ウチノ原は本北部
周山	13	126	102	10	17	16	291	144	432	
福岡北部	15	50	72	0	7	10	102	7	109	
筑前西部	11	30	21	0	0	20	59	22	111	
筑前北部	49	103	63	1	1	10	227	17	244	
筑前中部	1	6	4	3	1	9	30	4	34	
大分	3	32	17	3	14	16	87	60	163	

弥生後期の鉄器出土数  
(前田泰司「見えざる鉄器」『研究』2002年9月号一刷改訂)



このベンガラ産地の村がなぜ 大量の鉄を持っていたのか

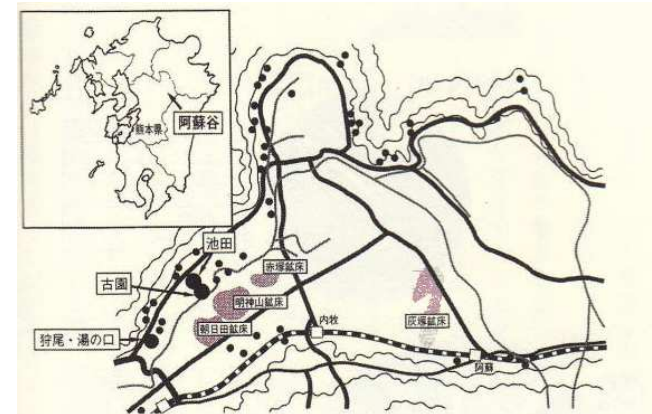
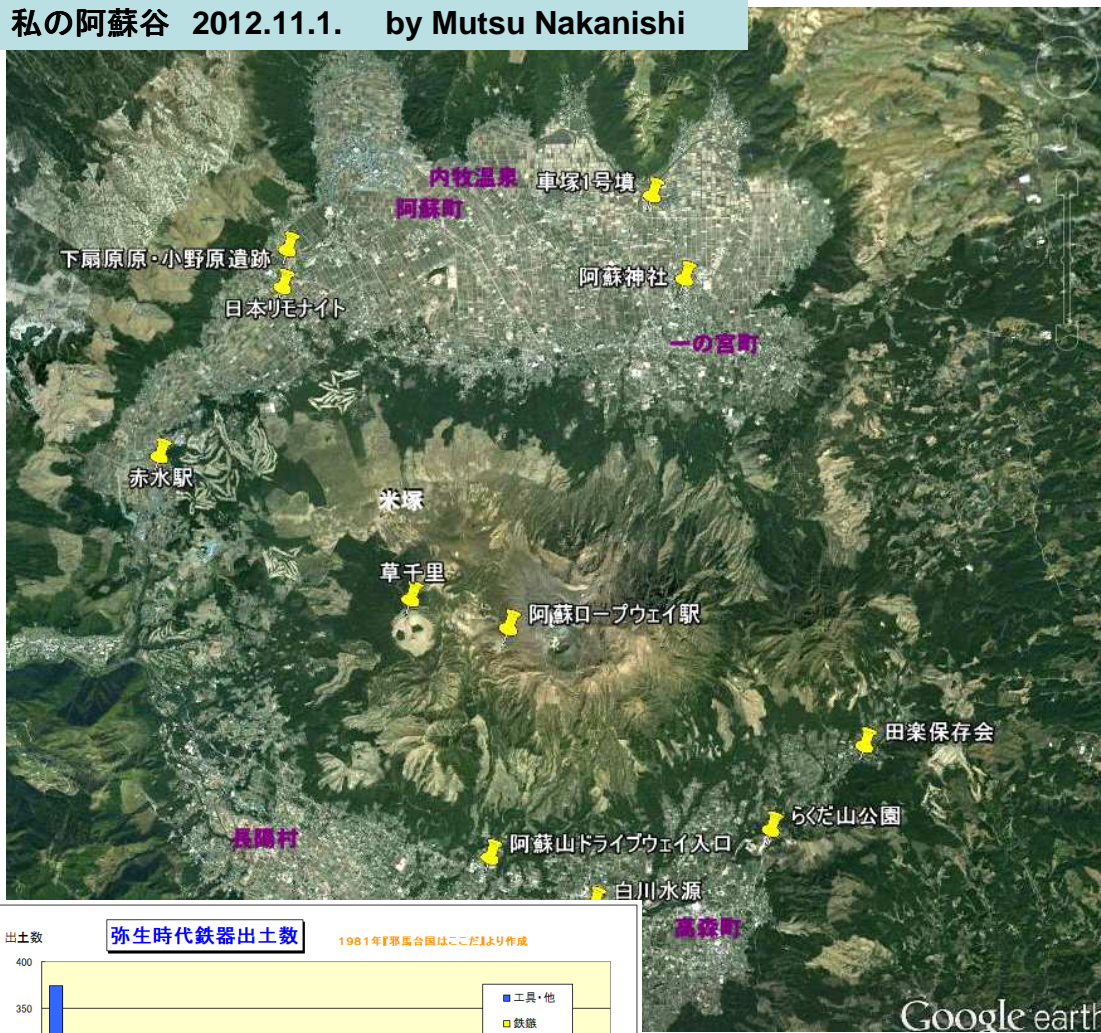
また、なぜ 大和王権の成立過程で これらの村が阿蘇谷から消えて行ったのか はまだよく判らないと聞きました。

また、手のひらに入る天草の砥石が大量に出土していることから、この地周辺の交易品として天草の砥石があったこと。

砥石を握って 砥石の方を動かして鉄製品を磨いていたことも興味深い

ベンガラの産地 阿蘇谷で出土した鍛冶工房 やっぱり ベンガラの採取生産に大量の鉄工具が必要で、その供給基地だったのだろうか・・・

私の阿蘇谷 2012.11.1. by Mutsu Nakanishi



《魏志倭人伝・抜粋文》

其四年倭王復遣使大夫伊弉聲耜掖邪狗等八人上獻生口倭錦絳青兼縣衣帛布丹木付短弓矢

其四年、倭王、復た使大夫伊声耜・掖邪狗等八人を遣わし、生口、倭錦、絳青兼、縣衣、帛布、丹、木付、短弓矢を上獻す。

との記載有る。倭王卑弥呼から魏へ贈られた献上品に「丹」(ベンガラ)が名を連ねていることがわかる。更に、

其山有丹其木有毆杼豫樟檉投檉烏號楓香其竹篠幹桃支有薑橘椒壤荷不知以為滋味有爾侯

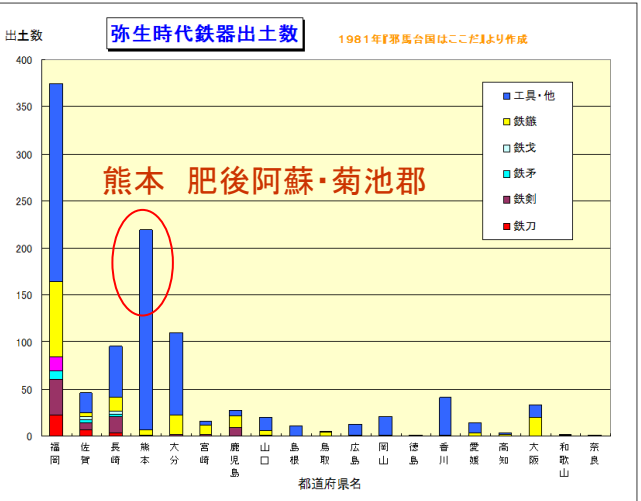
其の山に丹有り。その木には毆杼、豫樟、檉、投、檉、烏号、楓香あり。其の竹には篠、幹、桃支。薑、橘、椒、壤荷あるも、以て滋味となすを知らず。

との記載有る。倭王卑弥呼から魏へ贈られた献上品に「丹」(ベンガラ)が名を連ねていることがわかる。更に、

との記載から、卑弥呼の支配地域の産物として「丹」が特筆されていたことが窺える。

昭和五十四年、阿蘇町中通古墳群一帯で実施された園場整備中に、大量のベンガラ(鉄丹)が流出し、近くの水路が血のように真っ赤に染まっているのが見つかった。さらに同年、北外輪山の御塚横穴群から隙間なく、ベンガラで塗り込められた石室が発見された。同じ五十八年阿蘇町乙姫下山西遺跡の弥生後期石棺からも多量のベンガラが出てきた。三基あわせて百十キ口。

古代日本では活力と蘇生の象徴として、中国では不老不死の秘薬として珍重され活用されていた「丹」が、女王卑弥呼の絶大な権力に極めて大きな影響を与えたことは想像に難しくない。これまで研究者の間では「丹」を水銀朱とみなす説が有力だったが、ベンガラについての研究はなされてこなかった。



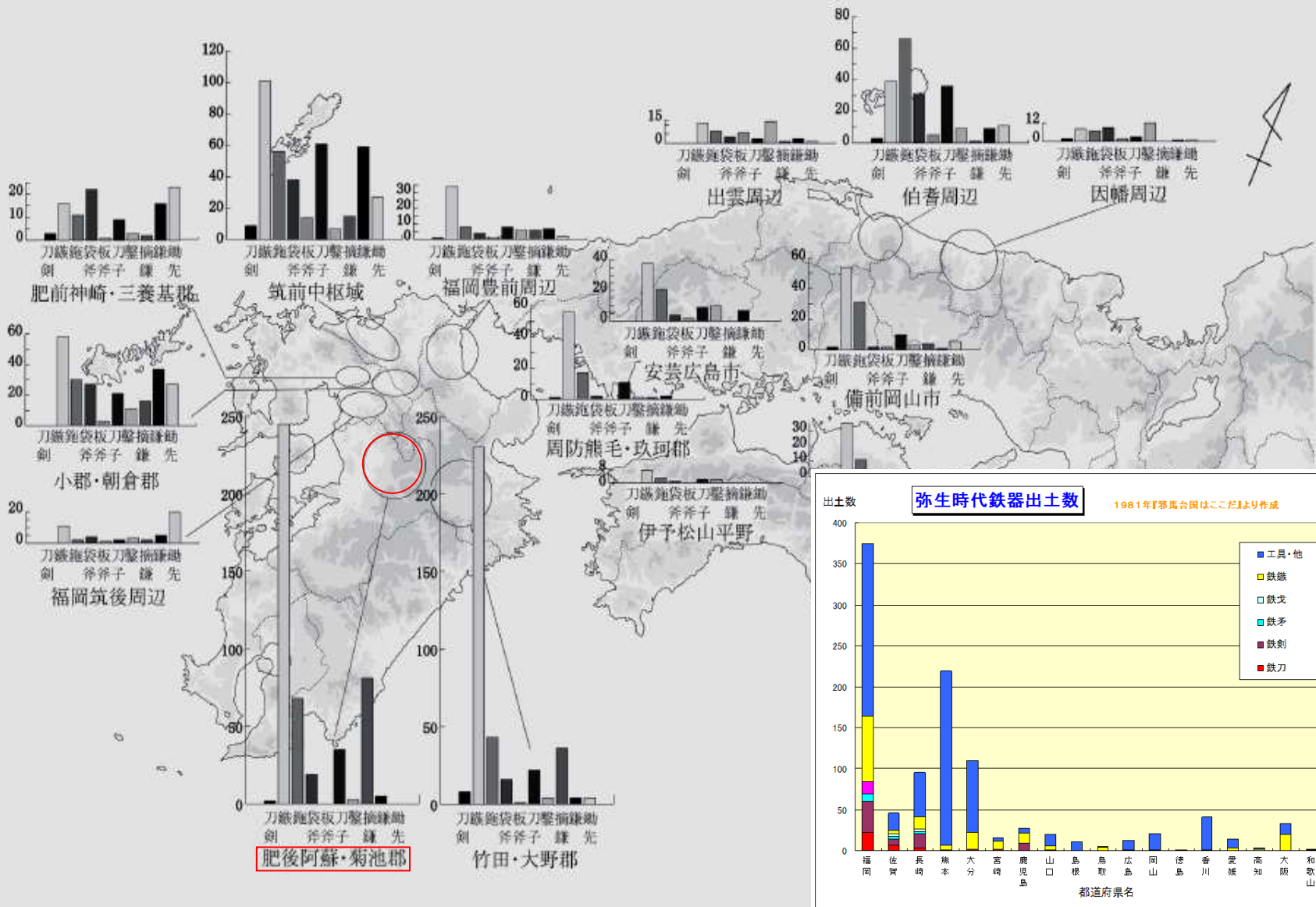
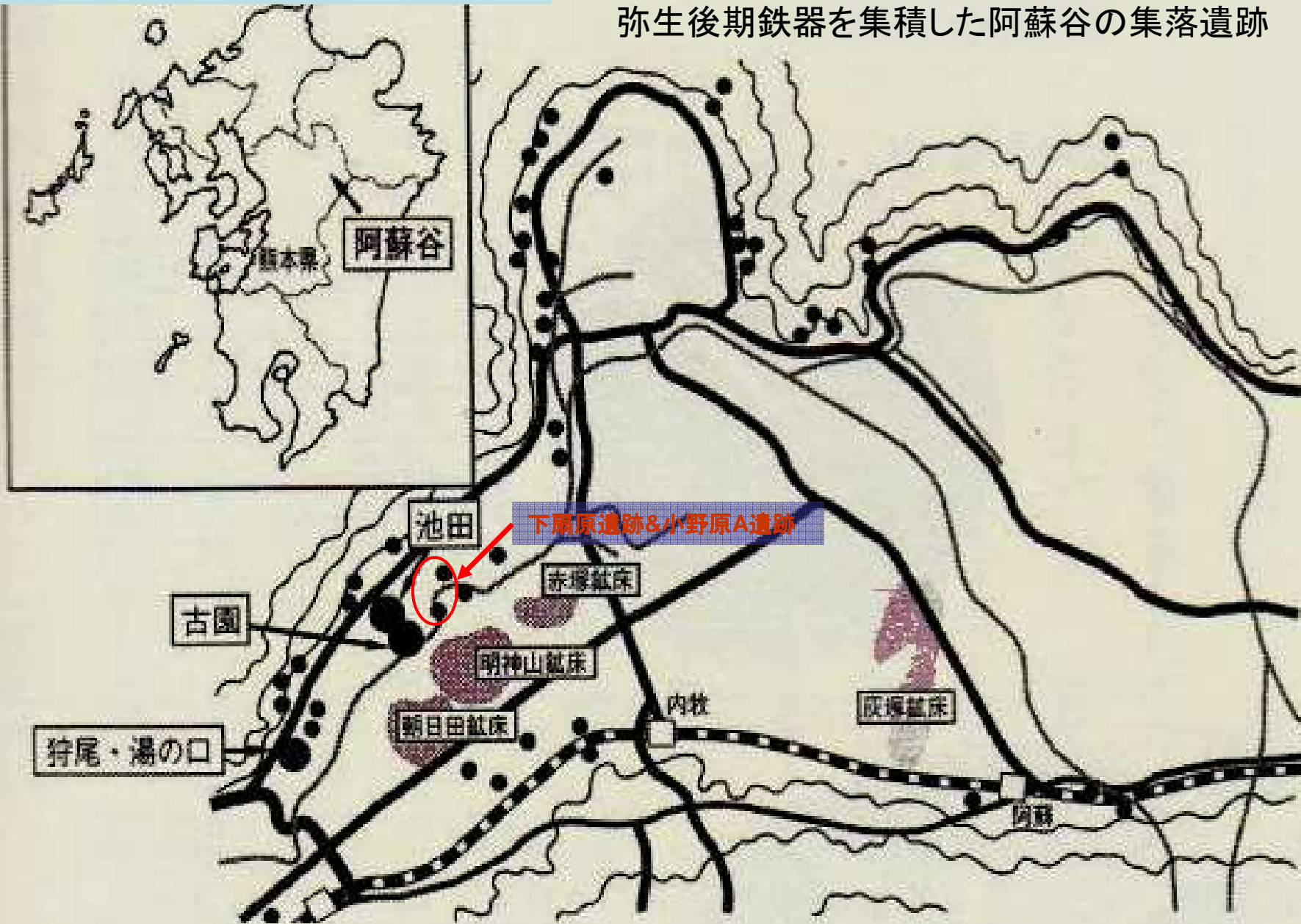


図 5.3 九州・中国地方における集落出土鉄器の組成（弥生時代後期中葉～終末期）

弥生後期鉄器を集積した阿蘇谷の集落遺跡



狩尾遺跡群の所在地（『古文化談叢』44号より）



小野原遺跡

下扇原遺跡

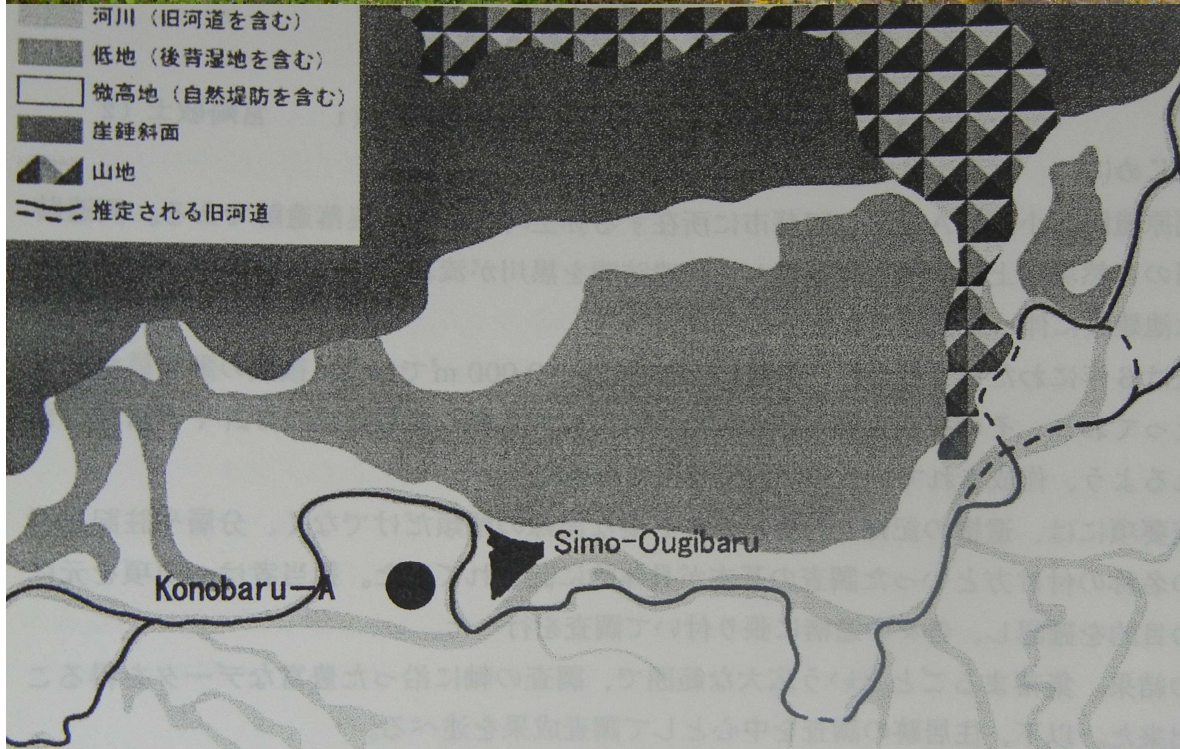


図2. 周辺の地形復元図

、 主要な遺構・遺物

下扇原遺跡：SB(住居跡)86基・SK(土壙)35基・SD(溝・円形周溝)3基

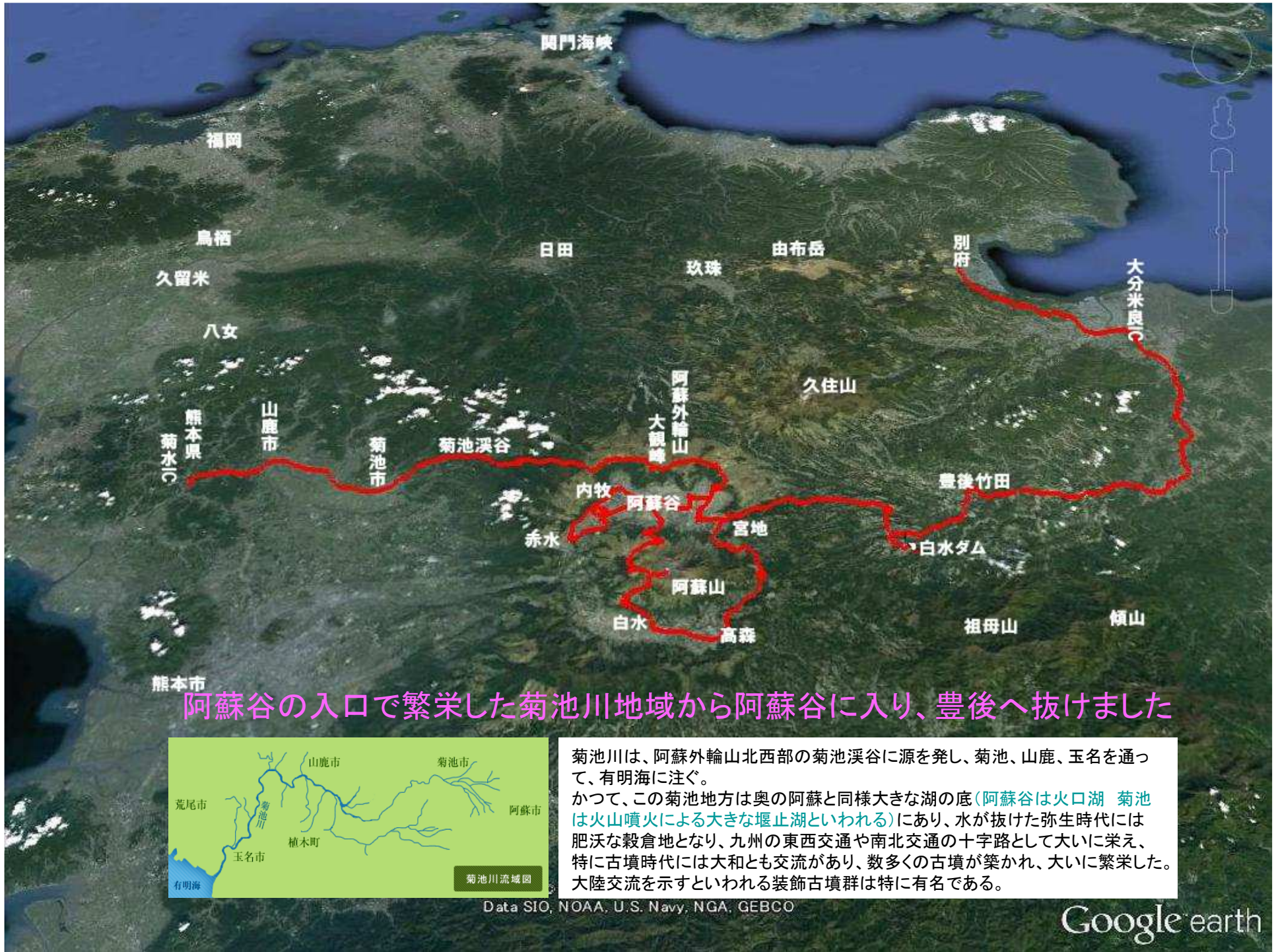
小野原A遺跡：SB21基・SD11基・SK36基・SX17基



図3 SB46出土鉄滓（左：俯瞰、右：部分）

下扇原遺跡出土鉄製品





阿蘇谷の入口で繁栄した菊池川地域から阿蘇谷に入り、豊後へ抜けました



菊池川は、阿蘇外輪山北西部の菊池溪谷に源を発し、菊池、山鹿、玉名を通過して、有明海に注ぐ。  
かつて、この菊池地方は奥の阿蘇と同様大きな湖の底(阿蘇谷は火口湖 菊池は火山噴火による大きな堰止湖といわれる)にあり、水が抜けた弥生時代には肥沃な穀倉地となり、九州の東西交通や南北交通の十字路として大いに栄え、特に古墳時代には大和とも交流があり、数多くの古墳が築かれ、大いに繁栄した。大陸交流を示すといわれる装飾古墳群は特に有名である。